

**Citation:** Oliver R, Roberts GJ, Hooper L, Worthington HV. Antibiotics for the prophylaxis of bacterial endocarditis in dentistry. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2008, Issue 4. Art. No.: CD003813. DOI: 10.1002/14651858.CD003813.pub3.

**CRG名:** Oral Health

## [最新版\(英語版\)はこちら](#)

**英語版最終改訂年月:** 8 October 2008.

**Clib issue No.;** N/U: 2008 issue 4; New Search

**背景:** 感染性心内膜炎は、心臓の内側に起こる死亡率の高い重症の感染症である。多くの歯科処置が菌血症を起こし、これがまれに細菌性心内膜炎(BE)を引き起こすと考えられている。多くの国のガイドラインで、心内膜炎の危険性の高い人に対する侵襲的な歯科処置に先だった抗菌薬の投与が勧められている。しかしながら、イングランドとウエールズのNICEの最新の指導では抗菌薬は必要ではないとされた。

**目的:** BEの危険性の高い人で侵襲的な歯科処置に先立つ予防的抗菌薬投与が、無投与あるいはプラセボ投与に比べて、死亡率や重症の疾患、あるいは心内膜炎の頻度に影響を与えるかどうか明らかにすること。

**検索戦略:** 検索方法は、前回のレビューから拡充し、MEDLINE(1950年から2008年7月まで)と、Cochrane Oral Health, Heart and Infectious Disease Groupの臨床試験登録に合わせて行った。さらに以下のデータベースにも用いた: Cochrane Central Register of Controlled Trials(CENTRAL: コクランライブラリー2008年第2号)、EMBASE(1980年~2008年7月)、metaRegister of current controlled trials(2008年7月まで)。

**選択基準:** BEの発生率は低いので、臨床試験はわずかしか見つからないだろうと予測された。このため、適切にマッチした対照群や比較群を用いて研究したコホート研究や症例対照研究も対象とした。介入としてはBEの危険性の高い人に歯科処置の前の抗菌薬投与と何も投与しないのを比較とした。コホート研究は、危険性の高い人を追跡し、何らかの侵襲的な歯科処置のあとで、予防投与を受けたかどうかで分け転帰を評価したものを対象とした。症例対照研究は心内膜炎を起こした人(危険性の高い人で、心内膜炎発症前に歯科処置を受けたことが確かめられていること)に、同等の危険性のある人で心内膜炎を発症しなかった人を対照にしたものを、対象とした。検討した転帰は以下の通りである。死亡率、あるいは入院を必要とする重大な副作用、なんらかの歯科処置後の一定の期間に発症した心内膜炎、その他の歯科的原因以外で発症した心内膜炎、記録されたあらゆる抗菌薬の副作用、心内膜炎を発症した患者に対する抗菌薬投与に伴うコスト負担である。

**データ収集と分析:** 2人の評価者が対象となる研究を別々に選び、その上で研究の質を評価し、対象となった研究からデータ抽出を行った。

**主な結果:** ランダム化比較試験、比較臨床試験、コホート研究はなかった。1つの症例対照研究が採用基準に一致した。

その研究では、2年以上にわたってオランダの心内膜炎のすべての症例を集め、180日以内に侵襲的な歯科処置があり、現在のガイドラインで危険性が高く予防が必要であるとされた心疾患患者で心内膜炎を発症した24例を見出した。この研究では、心内膜炎で死亡した人も対象とした。180日以内に侵襲的な歯科処置を受けた患者で、似たような心臓の問題で地域の循環器外来診療所を受診した患者を対照とし、年齢をマッチさせた。ペニシリン予防投与の、心内膜炎の発生率への効果は有意ではなかった。他のアウトカムについてはデータがなかった。

**レビューアの結論:** 細菌性心内膜炎の危険性の高い患者に対する、侵襲的な歯科処置へのペニシリンの予防投与が有効であるか無効であるかに関する根拠はない。この領域においては、発表されているガイドラインを支持する根拠を欠いている。抗菌薬投与による害の可能性やコストが、何らかの効果を上回っているかどうかははっきりしない。倫理的には、投与に関する判断に先立って、臨床家は患者と効果と害の可能性について話し合う必

(翻訳 福岡敏雄・監訳 湯浅秀道; JCOHR)

翻訳公開日: 09年2月20日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点ございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。